『聖なる痴女』

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　叶和泉

　　　登場人物

女（不詳）……痴女。聖なる者かは不明。

　　　一幕

　　　舞台中央に女がひとり、椅子に座っている。

　　　女は電気マッサージ機を両手に握り、それを股間に押し当ててオナニーしている。

女　ああ……いい、いい、ああ……ああ！

　　　電マでは物足りなくなったのか、股間に手もあて、身悶える。

　　　やがて、女は絶頂を迎える。

女　ふふ……。

　　　女は自分の指を見つめる。

　　　自らの熱でふやけた指先には、糸を引いた汁がついている。

女　うーん、デリシャス。

　　　指を嘗め回したあとで、女はつぶやく。

　　　再び電マのスイッチを入れ、股間に押し当てる。

女　ああ！　いい！

　　　先ほどよりも激しく女は身悶える。

　　　座っていた椅子からも転げ落ちるが、手に持った電マは放さない。

　　　やがて、全身を震わせながら絶頂を迎える。

　　　乱れた息を整えながらも、虚空を見つめたまま、女は横っている。

　　　やがてゆっくりと起き上がる。

女　ここにこれを押し当てると、全てを忘れることができます。ぶわーと気持ちのいい波 がやってきて、私の脳みそをグチャグチャにしてくれます。私は何も考える必要があり ません。ただ、これを押し当てていればいいんです。たったそれだけで、世界は一色に 染まります。気持ちいい、青い海の色に。

　　　女は電マのスイッチを入れる。

　　　ブーっという音が響き渡る。

女　寄せては返す波の音。その音に似ていると思いませんか？　最初は小さなさざ波が、 あっという間に大きくなり、最後は巨大な津波になって私のすべてを飲み込みます。何 もかも忘れて、私は海に身を委ねます。永遠に揺蕩（たゆた）っていたいと思うのに、 それは許されないのです。無慈悲に波は、すぐに私を浜辺に打ち上げます。立ち上がっ た私は、再び何度でも、波に向かって体を投げだすために走るのです。

　　　電マのスイッチを止める。

女　誰かに言われました。あなたは痴女だって。頭がおかしいって。色狂いのキチガイだ って。

　　　電マを愛おしそうに見つめる。

女　痴女……痴女、痴女、痴女！　あはははは、ははははは！

　　　狂ったように笑い転げる女。

女　そう、私は痴女。何も恥ずかしいことなどないのです。恥ずかしがることなどないの です。痴女の何が悪いというのですか？　痴女の何がおかしいというのですか？　私は 知っているのです。みんな隠れてコソコソと、私と同じ行為にふけっていることを。

　　　女、電マを振りかざす。

女　みんな嘘をついている。みんなみんな嘘つきで、正直ものは私だけ。みんなだって、 アレが大好きなんです。大好きで大好きで、大好きなのに、嘘をつき、興味ないふりを している。

　　　興奮し、電マを振り回しながら暴れまわる。

女　私から言わせれば、あなたたちの方が病気です。キチガイです。大好きなものを大好 きと言えない。キチガイ、キチガイ、キチガイ！　みんなキチガイだ！

　　　興奮が冷め、女は椅子に座る。

女　ここでひとつ、告白をします。

　　　女は電マをマイクに見立てる。

女　わたし、ほんとは嫌いなんです。海なんて大嫌いなんです。でもあの波は、全てを忘 れさせてくれます。あの波にもまれているときだけが、私を私でいさせてくれるんです。 だから私は海に身を沈め、波にもまれるしかないのです。そうすることでしか、私は生 きられないのです。

　　　女は電マを地面に置く。

女　あの波にもまれるためなら、私は何でもします。どんなに恥ずかしいことだってしま す。

　　　どこからともなく、女は長い布を取り出す。

　　　取り出した布を首に巻くと、テルテル坊主みたいな形になる。

女　もっと、もっと、大きな波を。すべてを壊してしまうぐらいの大きな波を！　私を壊 して欲しい。私をさらってほしい。海深くに沈み、二度と浮かび上がってこなくてもい いと思っているのに、どうしてもそうならない。気が付けば、いつもいつも浜辺に置き 去りにされている。もっと、もっと、もっと、もっと、自分から深く潜らなければ……。 海はすべてを受け入れてくれるのに……私を連れ去ってはくれない。

　　　女は着ている服を、順番に脱ぎ捨てていく。

　　　最後はブラジャーとパンティも脱ぎ捨てる。

　　　女は踊りだす。

　　　何かに駆り立てられるように踊り続ける女。

　　　やがて倒れ込む。

　　　その瞬間、光は消え、漆黒に包まれる。

　　　二幕

　　　真っ暗な舞台。完全な闇に包まれている。

　　　舞台には女がいる。そこへ誰かがやってくる。

女　誰？　何？　いや！　誰か！

　　　押し倒される女。

女　誰か、助け……！

　　　女が叫ぼうとしたその時、鈍い音が響き渡る。

　　　ゴッ、ゴッ、ゴッ、と、無機質に何かを殴りつける音だけが響く。

女　やめて……。

　　　音が止む。

女　……やめて…………お願いします。もうやめて下さい。静かにしますから。何でもしますから。

　　　布を切り裂く音。

　　　女は何も言わない。動かない。

　　　ギッ、ギッ、ギッ、っとという音が聞こえ、やがて止まる。

　　　舞台にゆっくりと明かりが灯る。

　　　椅子の上に、放心した女が座っている。

　　　死んでいるかのように、ピクリとも動かない。

　　　やがて、話し出す。

女　黒い海。悪意と欲望で満たされた黒い海。金属のように冷たく、刃物のように鋭利な 水が、ねっとりと絡みつき、全ての女を殺す。海原を飛ぶ鳥を追いかけたくても、羽ば たける翼を持ってはいない。与えられたものは痛み。苦しみ。憎しみ。奪われたものは、 尊厳、希望、意味。世界に捨てられ、黒い海に投げ捨てられる。どこまでも沈んでいく。 どこまでも深く、暗く。何もない海の底で、やがて魂は分解され、肉体は塵に還るのだ ろうか。いいや、そんな安寧はここにはない。永遠にも等しい時間は、煉獄と同じだ。 奏で続ける心臓の鼓動に、規則正しく繰り返される呼吸。肉体は檻と化した。魂の牢 獄。過去も未来もなく、ただそこにあるものは巨大なブラックホールのごとく虚無の世 界。原子が電子と原子核に、原子核が陽子と中性子に分解されていくように、魂も切り 刻まれ、すり潰され、細かい粒子になっていく。しかし、どれだけ細かくなってしまっ ても、消えてなくなるわけではない。消えてしまいたい。事象の水平線を越えたいと願 ってみても、輪廻の輪すら乗れず、ただ漂い続けるのみ。百億の昼、百億の夜を越えて も、何も変わらない。宇宙が無限であるのなら、もはや何の意味もない。宇宙が有限で あるのなら、やはり意味など何もない。あんなにも赤かった血は、今や何の色も持たな いただの黒い水と化している。少しの風すらも吹かない。波はなく凪いだ海はただ黒く、 どこまでも黒く、一片の光さえも見当たらない。黒い砂と化した魂は、それでもまだ消 えてなくなることはない。水底の砂漠に潤いなどなく、渇きを癒す水はない。

……。

　…………。

　その時、一陣の風が吹いた。頬にわずかに感じる程度であるが、確かに風が吹いたのだ。 水面が小さく揺れ、波が起きる。小さな風はさざ波になって、水面を伝わっていく。や がて波に乗って何かが流れてきた。手に触れた瞬間、流れてきた何かを握りしめた。そ うするしかなかった。そうするしかできなかった。蜃気楼とわかっていても、旅人は砂 漠に映るオアシスを目指すことしかできない。

　　　女は地面に置かれた電マを手に取る。

　　　ゆっくりとそれを股間にあてる。

女　あああああああああ！

　　　絶叫とともに立ち上がる。

女　それはまさに、青天の霹靂。それを押し当てた瞬間、落雷に打たれたような衝撃が走 りました。今までに体験したことのない衝撃に、私は膝から崩れ落ちました。稲妻が走 り抜けたそのあと、私の目の前に天使が降りてきました。蒼い、青い、碧い天使が、大 きな波に乗って。天使に導かれ、私を青い海に身を投げ出しました。……本当は天使な ど偽りです。憎むべきものに、私は身をゆだねました。憎むべきものに、私は溺れまし た。

　でももう、黒い海に戻りたくはありません。もはや、戻ることもできません。私は青い 海を漂います。漂い続けました。どれだけの時間漂っていたのか、思い出すことはでき ません。あることに私は気づきました。魂の一粒までも黒く染まった私は、青い海を漂 うことで、少しずつ色が抜けていったのです。

　コールタールよりもねっとりと絡みついていたあの黒い海は、長い時間をかけて、少し ずつ、少しずつ、青い海に溶け出して、私の体から抜けていったのです。漆黒からつる ばみ色に……鈍色、鉛色、灰色、そして薄墨色へ……気の遠くなるような時間をかけて、 少しずつ、しかし確実に、私の中から黒い海は抜けていきました。どれだけ色が抜けた としても、真っ白にはなれません。でも、それでもいいのです。それしかできないので す。

　例えば冬の日の朝、キンと張りつめた空気の中に漂う、白い息のように。例えば夏の日 の午後、じっとりと絡みつく汗と熱気の中で飲む冷たいビールのように。あの現れては 消える雲に、時には雷鳴轟かせ豪雨を降らす、そんな雲になりたかった。あの雨になり たかった。時にはしっとりと、時には大地を削り取るぐらい激しく、しかし、川や海の 源であり、命の源でもある雨。どれも同じなのに、どれも違う。形に合わせて自らを変 えてしまう、そんな雨になりたかった。

　でも、私には痴女になる以外の道は残されていなかった。痴女になる以外の才能は何も なかった。なんて滑稽なのでしょう。憎むべきものにすがり、憎むべきものに身をゆだ ねた私は、憎むべきものに救われようとしている。みなさん笑ってやってください。哀 れな女を笑ってください。ふしだらな女を笑ってください。皆さんが言うように、きっ と私は狂っているのでしょう。

　　　女、奇声を発しながら、狂ったように踊りだす。

　　　どこからか巨大な紙を取り出し、何かにとりつかれたように、破り続ける。

　　　三幕

　　　舞台の縁に腰かけている女。

　　　手には電マが握られている。

　　　女、縁に腰かけたまま寝ころぶ。

女　廃ビルの屋上、私はいつものように行為にふけっていました。邪魔するものなど誰も いない。わたしと天使、ふたりだけの楽園。天使はあっという間に、私を天国へ連れて 行ってくれます。何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度もイキまし た。脳みそがミキサーでかき回され、ドロドロになったようでした。体も輪郭が無くな り、魂だけが空を漂っているようでした。私は、仰向けになり、ぼんやりと空を見つめ ていました。雲ひとつない空でした。どこまでも続く青空でした。

　　　女、勢いよく起き上がる。

女　私はその時、気づきました。気づいてしまったんです。わかってしまったんです。空 の青さも、海の青さも、同じ青さだということに。

　　　電マを空高く掲げる。

女　空は誰の涙なのでしょう？　私にはわかります。あの青い空はお日様の流した涙のあ となんです。あの光り輝く太陽だって、きっと涙を流すのです。暗い夜、月の影にかく れてワンワンと泣いているのかもしれません。泣いて、泣いて、泣いて溜まった涙の海。 それが空の青であるとしか、私には考えられませんでした。

　太陽だって涙を流す。どんなに光り輝くものでも、悲しみを背負い、強く光りを放つが ゆえに大きな影を落とす。

　どんなに泣いても強くはなれません。どんななに泣いても悲しみは消えません。どこま でも、どこまでも続く青空のように。

　　　間

女　泣いているのは私だけではありませんでした。空の涙と海の涙に挟まれた世界で、私 たちは生きているのです。生きていかなくてはならないのです。なんという救いなので しょう。なんという絶望なのでしょう。神様も天使もいない、私たちが生きる世界。

　　　間

女　立ち向かうことも、逃げることも、憎むことも、忘れることもできませんでした。で も、憐れむことはできました。許すこともできました。海と空はすべてを受け入れてく れます。空の涙も、海の涙も、全部同じ涙なのだと知りました。私はようやく……受け 入れることができたのです。

　　　女はゆっくりと立ち上がる。

　　　その姿は、穢れなき聖者のようである。

女　私、もう行きます。だって、私はずっとイってばかりいましたから。もう充分なほど イキましたから。イクことにも、そろそろ飽きてきたところです。

　　　女はゆっくりと客席を見渡す。

女　どうかみなさん、お元気で。さようなら。

　　　女は握っていた電気マッサージ機を手放す。ゴトリ、と鈍い音をたてて床に落ちる。

　　　女はまっすぐに前を向き、歩いていく。

　　　舞台をおり、客席を抜け、外へと出ていく。

　　　女の向かう先に、光が差し込む。

　　　女がどこへ向かうのか。

　　　それは誰にもわからない。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　幕